

若者と観光ーフィールドワークを手がかりに

今 防 人

英語コミュニケーション学科非常勤講師

今年（2005年）5月、7月に3年ゼミ生と静岡市で観光資源調査を実施した。全員が静岡市に行くのは初めてであった。幾つかの班に分かれて主要な観光資源を調査した。調査結果も興味深かったが現代の若者の観光意識という点でも興味を引いた。本稿では彼らの観光意識に焦点を当てて考察したい。

一. 体験観光の重視

現代の観光の人気あるタイプの一つが体験観光であることはかなり知られてきている。学生たちも現在の50代、60代だったらたわいもないと思われることになり熱中していた。幾つかの例をあげよう。登呂遺跡を調査した班のメンバーは次のように述べている。

次に行ったのは登呂遺跡。遺跡というよりは公園といった感じで、高床式倉庫などを再現してあるだけだった。しかし、その中にあった登呂遺跡博物館に行けば遺跡を理解することができる。一階は貫頭衣の着用や火おこしなど、弥生時代の暮らしぶりを体験したので、二階の発掘された当時のものを見たときに、感慨深く感じられた。(男子学生)

登呂博物館は、予想以上に面白かった。登呂博物館は入場料が200円と安いのに接客態度も素晴らしかった。また実際に臼を作ったり昔の農機具に触れたり火を起こす体験など、中身が満載だった。(男子学生)

登呂遺跡は住宅地の真ん中にある。公園風の中に博物館はある。かつては先史時代の代表的な遺跡として有名だった登呂遺跡も規模から見れば三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡の後塵を拝することになるだろう。しかし、実際に火おこしをして見たりうすの一部を作成したり貫頭衣を着てみることにより弥生人がずっと身近な存在になったのであろう。つくる、着るという行動が彼らの想像力をかき立てたと言えるだろう。現代は情報過多の時代とも言われる。しかし、一番

手ごたえのある情報といえはまず自分の五官を使った体験による情報であることは今も昔も変わらないのであろう。もっとも〈体験観光〉をアピールするのも情報であるが。

体験観光の良さはものづくりで遺憾なく発揮されることもあるだろう。静岡市の主要な産品であるお茶でも体験された。

二日目、まずは日本平に向かい日本平茶会館を訪れ茶摘み体験を行った。一枚の袋を渡され、ご主人に案内され茶畑に向かった。まずご主人から摘める茶葉の説明、「一針三葉」を心がけながら茶摘みを行った。30分という短い時間であったが、日差しが強かったためとても大変な作業であった。茶摘み体験後お茶を一杯頂き、その後ご主人に様々な話を聞くことができた。話の中で一番驚いたのが茶畑はたくさんあるものの、茶摘み体験をやっている所はほとんどないそうだ。理由としては、管理上の問題や、病気の問題があるかららしい。(女子学生)

学生は茶摘み体験観光に提案する。

しかし、摘んだ茶葉は、1日しかもたないので観光客にとっては、せっかく自分で摘んだお茶の葉なのに使い道に困ってしまう。茶会館では、35名以上の団体だと製茶体験もできる。ご主人が、お茶の葉は料理に使うとおいしいと教えてくれたので、自分で摘んだお茶の葉を持ち込んで調理してくれたり、もしくは自分たちでできるような施設があればいいと思う。茶摘み体験自体も楽しかったが、その後のサービスに物足りなさを感じる。せっかく自分で摘んだお茶の葉なので、観光客はやはり、その味を口にしたいと思うのではないか。ただ、茶会館に来る途中、茶畑はたくさん目にしたが、茶摘みが体験できる場所は少ないようなので、貴重な場所だと思った。(女子学生)

ものづくりは染物という現代では余り経験できない分野での貴重な体験となる。

駿府匠宿は伝統工芸品を創り、学べるところで、私達も和染を体験した。私達はハンカチを作った。初めて染物をして、とても楽しかった。割り箸やビー玉を使って作る模様は、昔の人が考えてきた知恵なのか、神秘的で和調のカワイイ模様ができる。藍色の染液で2回ほど染め、乾かして、出来上がり。けっこう簡単に、伝統的な作り方を体験できた。実際やってみて楽しいと思える。私は他にも、陶芸をやってみたかったが、値段が高かったので、断念した。他の体験コースももう少し安くできたら良いと思う。できたハンカチを先生方達にプレゼントして、喜んでくれたのが、私にとってもうれしかった。(女子学生)

風鈴作りでも体験は新鮮に映った。

実際私達も体験することに。私とNさんとGさんは竹千筋の風鈴作りを、Oさんは漆器の箸作りをやることにした。風鈴作りのほうの様子しか分からないが、こちらは常にテーブルが埋まるほどの人気ぶりだった。かと言って混雑しているわけではないので、作るのに集中できた。指導してくれるおじいさんも、沢山の人の人に教えるのは忙しそうにも関わらず、丁寧に分か

りやすく教えてくれてうまく作ることができた。ここでも感じたことは、子供が作っていて、親が見ているといった人たちが多くということだ。また、大学生風の女の人が4人くらい来ていて、観光なのかな、と思った。作るのに苦労した分、出来上がったときの喜びは大きい。大量生産・大量消費が昨今の今、手作りという感動を忘れがちな日本人にこのような体験を是非してもらいたい。そのような意味でも、観光という意味でも、町おこしという意味でも、この施設は有効なのでは、と感じた。3日目の調査である。

考えてみると現代の若者は家事の手伝いも一昔前とは様変わりしている。高度経済成長以前に子供時代を送った人々がやった、やらされた手伝いの一つとして、風呂の水汲み・風呂を沸かす、薪割りが挙げられる。冬が厳しい北国では山のような薪を割っておかなければ冬を過ごせない。風呂と井戸が離れている場合水汲みも決して楽な手伝いではない。手押しポンプを使ってバケツに汲みそれを風呂に入れる。これを何回も繰り返さなければならない。薪割りも側で見るほど楽な仕事ではない。特に節のある場合はうまく割れない。三束も割れば汗を充分かくことは必至。これらの手伝いは1960年代の燃料革命によって姿を消した。家で餅をつく経験がある若者は農家を除けばほとんどいないだろう。あるとすれば保育園や幼稚園の行事か？

何よりも戦後の食糧難の一時期には多くの家が畑を持ち野菜や果物を栽培していた。夏季はまさしく日本がモンスーン地帯にあることを証明するくらい雑草が見る見るうちに生える。長じて農夫症という言葉に出会った時はなるほどと思った。また下肥を汲み取り畑にまくことなど現代では水洗トイレが発達した現在では想像も出来ないだろう。現代の若者にはこうした手伝いはほとんど無縁とあって良いだろう。さらに近年目立つことは農家出身の学生が農作業の手伝いをやっていないことである。男女を問わずである。東京に通勤可能な近県では農家では跡取りを諦めている節がある。

総じて言えることは肉体労働が激減したことであろう。また消費生活が使い捨ての時代に入っていることが挙げられる。自宅で衣類を染めることなどまずあり得ない時代になっている。かつて和服をほどこいて着物をつくり染め直すことは大半の家でやっていた。大体染めることじたい辛うじて小学、中学であるかないかといったところだろうか。裁縫の必要性もないのである。

余談になるが大学祭ではゼミ生に必ず飲食の模擬店をやらせてもらうことにしている。一切口出しはしない。当日激励することくらいはやる。学生たちを観察すると意外に嬉々としてやっているようだ。かつて主として主婦がつくり子供や夫に持たせた弁当をコンビニやスーパーで買い家庭に持ち帰るという逆流現象が起こっている時代である。学生の家計簿調査をやったところ飲食のコンビニ、ファーストフード依存率が80%近い学生がいた。またアパート暮らしの学生はまずやかんを持っていない。冬でもペットボトルのウーロン茶を飲んでいる。お茶を入れることはない。

今回の調査で特筆すべきは静岡市清水区の港祭りのかつぼれ踊りに学生が参加したことである。最初に多少抵抗があったがすぐに溶け込んだのは若者の特権か？

夜にはかっぱれの予行練習に参加して、おばちゃんたちのご教授のもと、かっぱれを体験した。私たちが体験したかっぱれは最近の主流の踊りではなく、現在メインとなっている若者を中心とした速いリズムのダンスに加わることが出来ない方たちのために復活した踊りのようで、自分が踊るのはもちろん初めてで、見ることも初めて、聞く曲も初めてというまったくの初心者である私たちでもその曲が終わるころには何とか加われているという初心者にやさしい踊りだった。また、なにより良かったのは自分たちの列の間に入れてくれて、振り付け、振り付けの由来、踊りの楽しさをやさしく教えてくれたおばちゃん達だ。あの雰囲気を作ってくれたことで私たちは純粹にかっぱれを楽しむことが出来たし、かっぱれについて知りたくなった。なんとなく静岡の土地柄、人柄を感じることができた気がした。(男子学生)

しかし、一緒に踊っていた団体の方が踊りをよく見えるように踊ってくださったので、踊りやすく楽しみながら踊ることができた。「踊る、踊れない」よりも、「いかに楽しむか」なんだな、と思った。(女子学生)

二. 学習観光—歴史教育

静岡市の観光資源調査で目立ったことの一つに学生たちの歴史意識の希薄さである。清水次郎長を学生は全く知らなかった。これにはいささか驚かされた。振り返ってみると清水次郎長を何で知ったかというとももちろん日本史の教科書ではない。娯楽映画や流行歌からである。映画や流行歌が大幅に変わっていたのである。西園寺公望の家・坐漁荘が観光名所となっているがほとんどの学生が西園寺公望その人を知らなかった。

20年前くらいから学生の歴史意識というよりは歴史の基礎知識が急減することに気付かされた。フランス革命は19世紀などと平気で答える。高校で必修のはずの世界史は形骸化している。知識としてもほとんど残っていない。世界史や日本史を受験科目とした学生は驚くほど少ない。理由を尋ねると「範囲が広い」「覚えることが多い」などの理由からだ。

特に現代史の知識はゼロに近い。授業では現代まで行かなかったというのである。また日本史を受験した学生も受験が終わるとすっかり忘れてしまうようだ。

静岡市には鉄舟寺という寺がある。大政奉還で十五代将軍慶喜公に随行して静岡にやって来た山岡鉄舟が廃寺を再興したものである。西郷隆盛と勝海舟との会談の橋渡しをした山岡鉄舟の号を取っての寺名である。これくらい細かくなると誰もがわからない。詳しく話をすると「なるほど」と納得する。

近年「ゆとり教育」への批判が高まる一方である。現代日本の歴史教育の貧困状況の根幹が記憶、暗記の軽視にある。理解を錦の御旗として記憶を軽視する。しかし、理解といっても理解の素となる知識がなければ不可能となる。観光はまたとない歴史教育の現場となろう。現代の若者の歴史知識の欠如は深刻である。これは小中高の教育現場での対策も問題となろう。しかし、観光の前後で歴史の勉強を織り込むことで歴史への関心を多少なりとも高めることが出来るだろう。偏向・歪曲されてはいるが中国や韓国の歴史教育の多さに日本の若者は太刀打ちで

きないだろう。

しかし、アニメの採用など工夫を凝らす必要があるだろう。映像を駆使するなどアプローチしやすい工夫が大事である。文字を読むことは目前を流れる映像よりはエネルギーを要する。もっとも映像は情報量が文字よりも桁違いに多く、情報の取捨選択が大事となるのだが。

三. 環境意識

学生の報告書を読んで気が付く点の一つが環境意識である。例えば静岡市も長い海岸線を有しているが海に浮遊するゴミには大変敏感である。

わたしたちの自由調査のテーマが“海”ということもあり、初日の夕方に行ってみた。わたしが想像する海水浴場とは、江ノ島、鵜沼などのような海水浴場であった。行って驚いたのは、ニオイ、ゴミ、正面に清水港があることだ。そこは正面に港があるからか、生臭く、浜辺にはゴミがあるし、海の中にはパンが浮いていた。ほんとにこの海には入れるのか？ と疑問をもつほどであったし、正直この海にはわたしは入れない！ と思ってしまった…。実際に入っていたのは10人くらいであった。(女子学生)

全体を通して感じたのは自然の魅力とゴミの問題である。藁科川の上流では飲めるほどきれいだった水は安倍川の中流あたりで釣具やキャンプで出たと思われるゴミが浮いており、下流になればもっと汚くなってしまっていた。自由調査で広野海岸公園、用宗海岸、浜当目海岸を見て回ったが、どの海もひどく濁っており、子供たちがはしゃぎながら海で遊んでいる姿を見てなんだか寂しい気持ちになったし、病気にならないか心配だった。焼津港、清水港の海などは油が浮いており、帰ってきたフェリーから大量に出ているあの水はいったい何なのだろうと疑問に思わざるをえなかった。三保海岸では海に向かって花火を飛ばしている若者たちや、二人で海を見ながらジュースかなにかを飲んでいるカップルがいて、次の日の朝早く漁をしに行ってきた漁師さんたちがそのゴミを拾っている姿を見て怒りを感じた。同じ静岡には伊豆というきれいな海があるのに、ここの海が汚いのを疑問に感じる人たちはたくさんいるはずだ。現状を作り出している原因は観光客だけではなく、地元の人間の意識の問題でもあるのだ。(男子学生)

しかし、三保の松原にはごみ箱が設置されていないため、マナーを守らずポイ捨てしてしまう人のためにも、設置した方がいいのではないかと感じた。(男子学生)

昨年調査の下見を兼ねて清水漁協の好意で三保の松原、清水港、薩埵峠を船で見学させて頂いた。清水港はかつて東京を中心とする関東への木材の輸入港であったことを裏付ける丸太を係留する無数といってよいほど多数の杭が海面に頭を出していた。海水も濁っていた。港は市の管轄下にはない上に権利を有する会社が複数あり簡単には除去できないとのことだった。地元の人に言わせると清水港は戦後の高度経済成長を支える主要な港だったという。清水港は産業港なのである。漁港でもない。現在では岸壁にはコンテナをつり上げるクレーンが何本もそ

そり立っている。観光とは程遠い風景である。しかし、上手に整備すれば三保の松原と薩埵峠を両側に配した景観は捨て難いものがある。

公害問題が全面的にマスコミに登場する 1970 年から既に 35 年になり環境意識が定着しているといえよう。しかし、身体内部の環境については前述のように添加物が盛り沢山なコンビニの弁当や茶栽培には大量の農薬を使用することなど注意して欲しいとの感想を抱いた。なお静岡の場合一番茶には農薬は使用されていない。虫が出る前に収穫されるからである。

四. 根強い picturesque な景観

学生の景観に関する意見には根強い伝統が見られた。三保の松原に行った学生の感想をしてみる。

坂を登るとそこには立派な松と、遠くには浜辺が見えた。この景色には本当に感動した。大学の調査だけでなく、一観光客としてももう一回来たいと思える程だった。立ち並んでいる松の中の中央に羽衣の松があった。存在感があり立派な松だったのだが、老朽化が進んでいるということで、他の場所に羽衣の松二世が植えられていた。(男子学生)

羽衣の松自体はかなり老朽化しているものの、松原とあわせた景色はとても雄大で感動的だった。富士山も見えたなら本当に素晴らしいだろう。(男子学生)

これらの学生が白砂青松という言葉を知っているかどうかは分からないが彼の中にそのイメージが定着していることは容易に想像できる。水墨画の日本的なヴァリエーションである白砂青松が意外に若者の中にも存在していることをうかがわせる。思うに視覚は振動などの体感や嗅覚ほどには直接性がないのかもしれない。次の学生の感想を見るとその思いを強くする。

確かに福養の滝に着いて滝を見上げた瞬間思わず「すげえー」と言ってしまい、日頃目にできない自然の雄大さに目を奪われた。滝は緑の木々の間から流れ出て、まるで白いカーテンのような美しい滝だった。(男子学生)

滝の落下する轟音、地響き、水しぶきはまさに聴覚や体感により強調された視覚の世界であろう。若者が革新的だというのは一つの神話かもしれない。伝統を即自的に受け入れるのは若者であろう。しかし、反発、反抗のエネルギーを有しているのも若者である。もちろん体験と表現は必ずしも一致しない。表現が一つのテキストであることもまた事実である。

五. 準拠枠としての東京

学生が通う大学は東京都世田谷区にある。新宿から約 30 分で大学に着く。学生の多くが首都圏出身である。従って彼らの都市観が東京を準拠枠としていることは間違いないだろう。地方都市としてはかなり大きな静岡市であるが学生からすると物足りない映ったようである。

清水港にはドリームプラザがあるが、観光しに来ているのにわざわざあのような場所には行かないような気がする。それより焼津港にあったようなすーと引き込まれるような地域独自のお店を作るべきだと思った。(男子学生)

こうした視線は明らかに観光客しかも大都会からの観光客の視線である。静岡市清水区のエスパルスドリームプラザは年間数百万人のお客を受け入れている大型商業施設である。お客の多くが近隣からの客である。静岡市はお茶、みかん、バラ、枝豆、タケノコなどを主要産品とする農業が盛んな市である。気候は温暖で雪は年1回くらいしか降らない。降っても積もらない。地元の人に言わせると乞食をやっても食っていける、と静岡人はいうそうである。農業以外に漁業もある。駿河湾で獲れるトラフグは真っ直ぐ下関に行ってしまう。そこで下関ブランドに変身する。近年、駿河湾ブランドを開発しようといっている。豊かな県は観光にあくせくしない。関東でいうと茨城県がそうである。静岡県と同様に海の幸、山の幸が豊富である。

静岡市はどちらかというと自己完結型である。遠くからお客を積極的に呼ぼうなどとらえる市民はまだ多いとはいえない。しかし、静岡市の家具、サンダル、下駄などの地場産業は右肩下がりである。しかも工業出荷高では浜松市にはかなわない。人口も抜かれている。数年後には静岡市に隣接する市町に新国際空港がオープンする。国際的な交流人口が増大するチャンスである。観光振興することがこのチャンスをものにできるわけである。心ある人々は真剣に観光を考えている。

六. 若者が考える観光振興

調査に参加した学生は静岡市の観光振興策をどのように考えているのだろうか?最後に学生の振興策の提案を見てみたい。

静岡市はこれと言った観光資源が少ないが静岡県の中で群を抜いて特産品の数が多い。デメリットを改善するのも良いが、例えばプロサッカーチームの清水エスパルスのユニフォームに特産品の名前を入れさせてもらうなど、もっと特産品の宣伝にマスコミを利用するなどメリットを伸ばすことに力を入れて、静岡市をアピールしていくべきだと思う。また、市街地を出て車で回ってみると空き地というかわかれてなさそうな土地が目についた。個人的に藁科川の下流の安部川の近くの広いスペースを活かして今若者の流行のフットサル大会など催したり、観光団体が来られる大きなバーベキュー場などを作ったりしても良いと思う。また癒しを求める観光客をターゲットに狙って山間部に伊豆市とは違った夜景の見える露天風呂などを作れば違ってくると思う。静岡市はアピールのやり方次第ではこれから大きな発展も望めるのではないかと思わせる場所だった。(男子学生)

参加した学生の多くが静岡市の観光が宣伝不足であることを指摘している。やはり上述のように市の観光関連機関・部局の努力が不足していると映ったようである。

さらに個々の観光資源を組み合わせることにより言わば周遊型のコースを創ることが大事と

の指摘をした学生も多い。

その後、すぐ近くにある末廣に向かった。ここでは15分ほどの次郎長についてのビデオを流したり、当時の生活用品の展示、次郎長を再現した人形などがおかれ、次郎長をこの地域の歴史的人物として、積極的に紹介していた。次郎長の生家、末廣、壮士の墓この三つは近くにあり徒歩でも十分に回れるのでこの利点を活かせたらと思う。(男子学生)

まずは三保地区へ行った。道中、標識がたくさんあり、問題なく着いた。広い駐車場(無料)にはバス駐車場、公衆トイレ、資料展示のある土産屋があり使いやすかった。羽衣の松、エレーヌの碑、御穂神社が近接しており、ゆっくり歩ける散歩コースになっていることも考えれば、この駐車場はかなり価値があるだろう。(男子学生)

私は現在ある観光資源は観光客に十分に満足を与えられるものであると考える。なぜなら、このきれいな自然の中で鮎や岩魚を釣る、川原でバーベキューを楽しむ、緑にかこまれた中で温泉につかるということ自体、十分に魅力的な行為であるからだ。特に私のような東京で生まれ東京で育ってきた人間には自然というものに憧れがあり、実際、調査に訪れたわずかの間にその自然の美しさに魅了されてしまったのだ。調査に訪れた場所でも釣り人はいろいろな場所にいたし、険しい山道ではキャンピングカーともすれ違った。自然を眺めて絵を描いている人もいた。それだけ人の心を惹きつける力があるということだ。しかし、欠落しているものがある。それは連携だ。それぞれの資源は確かに魅力的なのだがそれ単体だけではここまでの山奥にはこよと思わないはずだ。それらの1つ1つが協力し合って全体で一つの流れが生み出せるようになったらそれはもう、「薫科・鮎釣り温泉ツアーおいしい緑茶付きコース」の誕生だと思っている。(男子学生)

七. 最後の一

今回の調査は筆者にとっては調査、教育と同時に若者の観光意識とその背景を考える上で興味深いものがあつた。彼らの反応は意外にまともだといえよう。中には静岡市は住むのには良いが観光で来たいとは思わない、という鋭い指摘があつた。この学生は恐らく静岡市が全国の住みたい地域の上位を占めていることは知らないが経験を通して直感的に分かつたのだろう。色々批判の対象となりやすい現代の若者だが優れた感性を持つものも少なくないことがわかつた。